

Vijñapti についての再考察

北 野 新 太 郎

I 問題の所在 よく知られているように、唯識 (vijñapti-mātra) という場合の「識」の原語は vijñapti である。それゆえ、vijñapti という言葉が唯識 [無境] の立場にたつ唯識学派の思想を理解するために重要な意味をもつものである、ということは説明を俟たないであろう。最近では、vijñapti に対する現代語訳として「表象 (Vorstellung, representation)」という言葉が使われることが多いようである。例えば、瑜伽行派の文献における、「唯識」という言葉の最初の使用例として知られている、『解深密経』 (= *Samdhinirmocanasūtra* = SNS) の「識の所縁は唯識の所現」である、という一節に即して考えると、「vijñāna (rnam par shes pa) の ālambana (dmigs pa = 対象) は vijñapti-mātra (rnam par rig pa tsam) として顕現したもの」である、ということになるから、この、『解深密経』の段階では、「表象」という訳語は、極めて妥当なものであるといってよいと思われる。しかし、反面、『摂大乘論』「所知相分」には、見識、相識という言葉がでてくるのであるが、そこでの「識」の原語は vijñapti (= rnam par rig pa) である。そしてこの場合、「表象」というよく使われる訳語を vijñapti にあてはめると、見識は「見るはたらきを有する表象」と訳さざるを得なくなり、意味が不明瞭になってしまう。vijñapti を「表象」と訳すことを疑問視する見解は、芳村博実教授や、上田義文博士らによって提示されてきたのであるが、その中で、最も注目すべきものは、芳村教授による指摘であるといつてよいであろう。芳村教授によれば、『唯識二十論』第 9 偈 d 句の 'tasyā (h)' という、女性・単数・genitive の代名詞の意味するものは、ヴァスバンドゥ自身の注釈からもわかるように、vijñapti であり、それ (vijñapti) が眼根と色境、すなわち種子と顕現とを有している、という構造がそこ (第 9 偈) において示されているのであるから、色境に相当する顕現 (abhāsa) は vijñapti とは別なものであり、vijñapti は主観と客観との両方に跨がる形でそれらを包摂するはたらきを有している、ということになる。以上の芳村説は、極めて妥当な考え方であるといつてよいであろう。芳村教授は、*Madhyāntavibhāga* (= MV = 『中辺分別論』) 第

I 章第 3 偈において説かれる、よく知られた「四識の顕現」の中の一つとして示される vijñapti についても、vijñapti 研究の一環として検討されているのであるが、そこにおいて芳村教授は、「四識の顕現」の中の四番目の vijñapti に着目し、それが「能所の対立」における「媒体的」な存在としては位置づけられてはいない、という意味において、MV 第 I 章第 3 偈の vijñapti は、『摂大乘論』『三十頌』『二十論』における vijñapti とは異なった意味で使われている、といわれている¹⁾。しかし、『瑜伽論』『摂決択分』における「アーラヤ識の存在論証」について説明する箇所では、アーラヤ識が、内・外両方向の認識 (vijñapti) を有している、といわれており、筆者は、それが、「主観・客観の二つに跨がる vijñapti」というものの、より古い使用例ではないかと考えている。そこで新たに問題となるのは、何故、MV 第 I 章第 3 偈よりも、その成立が古いとみられる『瑜伽論』『摂決択分』において、すでに確認される「主観・客観の二つに跨がる vijñapti」が、それよりも新しいとみられる MV 第 I 章第 3 偈においては、見出されないのか、ということである。本稿の目的は、唯識三性説研究の一環としても重要であるとみられる vijñapti に関する諸問題の中の、特に、以上のような問題点について再検討することにある。

2 『瑜伽論』における四つの vijñapti MV 第 I 章第 3 偈については、『弁中辺論述記』において、基による真諦批判がなされていることからわかるように、古来、問題とされることの多い偈であるといえるのであるが、そのことは、かつて長尾雅人博士が指摘されたように、その MV 第 I 章第 3 偈が、かなり複雑な、〈二重構造〉、或いは〈三重構造〉とでもいうべき構造を示していることによるとみてよいであろう。そして、MV 第 I 章第 3 偈においては、「顕現」の意味が、SNS におけるそれとは異質なものになっており、その (MV 第 I 章第 3 偈の) 段階では既に、「顕現の結果としての形象」としての四識の中に、認識における主観面と客観面とが包摂される構造が示されている。このように、複雑な構造を示す MV 第 I 章第 3 偈は、何らかの思想的背後関係をもっているのではないかと考えられるのであるが、例えば、『瑜伽論』『摂決択分』においては、「アーラヤ識の存在論証」に関する箇所では、以下のような「四種の業」というものが示されている。

tathā hi samāsataś caturvidhaṃ karma — bhājana-vijñaptir āśraya-vijñaptir aham iti vijñaptir viśaya-vijñaptiś ceti²⁾ /

訳：なぜならば、略説すると、業は、四種類であって、①器 [世間] の vijñapti と、②依りどころ (= 個体存在) の vijñapti と、③「私である」という vijñapti と、④対境 (=

viṣaya) の vijñapti とである。

それに対して、MV 第 I 章第 3 偈は、以下のごとくである。

artha-satvātma-vijñapti-pratibhāsaṃ prajāyate /

vijñānaṃ nāsti cāsyārthas tad-abhāvāt tad apy asat // I・3³⁾ //

訳：対象・有情・自我・識別作用として顕現する識 (vijñāna) が生じる。しかし、それ (識) の [四通りに顕現する] 対象は、[依他起性としての識のはたらきに他ならないから、外界の対象としては] 存在しない。それ [らの四通りの対象] が存在しないから、それ (識) もまた存在しない。

『瑜伽論』「摂決択分」の「四種業」と、MV 第 I 章第 3 偈の「四識」とを比べてみると、①器 [世間] の vijñapti、②依りどころ (= 個体存在) の vijñapti、③「私である」という vijñapti、④対境 (= viṣaya) の vijñapti は、それぞれ順次に、① artha、② sattva、③ ātman、④ vijñapti に対応していることがわかる。そして、①・②は、アーラヤ識の内・外面方向の認識 (vijñapti) であり、③はマナ識、④は六識であるとみるべきであろう。『瑜伽論』「摂決択分」の方が、MV 第 I 章第 3 偈よりも、その成立が先であるとみられるから、MV 第 I 章第 3 偈の“作者”は、『瑜伽論』における「四つの vijñapti」を前提とした上で、それらを省略した形で、artha・sattva・ātman・vijñapti として示したのではないだろうか⁴⁾。MV 第 I 章第 3 偈に対するヴァスバンドウの *bhāṣya* をみると、そこでの vijñapti は、pravṛtti-vijñāna のはたらきであるということがわかるのであるが、例えば、「三種の転変」について説明する *Triṃśikākārikā* (= TK = 『唯識三十頌』) 第 2 偈 ab 句においても、同様の省略の例が確認できる。そこでは、‘vipāko mananākhyāś ca vijñaptir viṣayasya ca ([三種の転変とは] 異熟と、思量と呼ばれるものと、対象を識別することである)’といわれており、そこでの vijñapti は、それ自体が転識 (pravṛtti-vijñāna) における対象識別作用を意味している。それゆえ、この箇所のみを見ると、アーラヤ識やマナ識は vijñapti ではないかのようにも考えられる。しかし、その直後の TK 第 3 偈 ab 句で ‘asaṃviditakopādīsthānavijñaptikaṃ ca tat’ といわれることからわかるように、アーラヤ識も、(主観・客観に跨がる) vijñapti を有している。つまり、TK 第 2 偈 ab 句に限定していえば、ヴァスバンドウは、アーラヤ識の vijñapti については、単に vipāka という言葉で省略して示し、pravṛtti-vijñāna の識別作用のみに vijñapti という言葉に対応させているのである。このことと全く同様に、MV 第 I 章第 3 偈の“作者”も、アーラヤ識の対象識別作用としての bhājana-vijñapti と āśraya-vijñapti とを、単に、artha、sattva と省略して示し、pravṛtti-vijñāna の識別

作用のみを vijñapti という言葉によって示した、と考えられる。

3 結論 以上の検討の結果として、以下のような結論を得るに至った。

MV 第 I 章第 3 偈の artha と sattva は、『瑜伽論』『摂決摂分』からの思想的連続性という点を考慮に入れると、アーラヤ識の直接的な識別作用 (vijñapti) としての bhājana-vijñapti, āsraya-vijñapti の省略された表現であると考えられる。そして、そのような artha と sattva は、それぞれ順次に、環境世界 (artha = bhājana-vijñapti) と個体存在 (sattva = āsraya-vijñapti) とに対応するとみられるから、それら二つの間には、認識における主観・客観の関係が確認できる、といってよいであろう。その意味で、「四識」の四番目の vijñapti のみに着目して、そこ (MV 第 I 章第 3 偈) では、「主観・客観の二つに跨がる vijñapti」は、示されてはいない、と考える芳村説には、再検討の余地があるようである。結果的に、芳村説を、部分的に批判することになってしまったが、筆者は、芳村説から教えられる点が多く、その意味で芳村教授を深く尊敬する者である。

1) 芳村教授は、次のようにいわれている。

『中辺分別論』一章三偈が内含する様々な能所の対立はこの相違を知る手がかりである。(1)において私は『摂大乘論』『三十頌』『二十論』の Vijñapti の使用例からみて、『中辺分別論』一章三偈で示される種々の能所の対立において、当然 Vijñapti が媒体的にこれら一つ一つの対立を内にもって存在すべきであると述べた。しかし今見たように、(1)におけるもろもろの使用例からみれば当然あるべき形において Vijñapti は単に四種の顕現の一に数えられるに過ぎない。(1)における『中辺分別論』の頌以外の使用例から見れば当然あるべきものが、一章三偈自身からは汲み取れない。」(下線北野) (芳村博実「Vijñapti についての一考察 (2)」『仏教学研究』第 43 号、1987 年、p.260, 1.15—p.261, 1.2.)

2) よく知られているように、『瑜伽論』『摂決摂分』における「アーラヤ識の存在論証」についての説明箇所は、*Abhidharmasamuccaya-bhāṣya* に引用されており、そこから、サンスクリット原典が回収されるので、ここでは、それを示した。(*Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*, Tatia ed., p.13, 11.5—6.)

3) *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, Nagao ed., p.18, 11.21—22.

4) 例えば、竹村牧男博士は、『唯識三性説の研究』(p.125, 11.16—21.)において、『瑜伽論』『摂決摂分』の「四種業」と、MV 第 I 章第 3 偈の「四つの顕現」との間には、思想的な連続性が認められる、との見解を示されている。

〈キーワード〉 vijñapti, 唯識, アーラヤ識, 三性説, 顕現

(大正大学総合佛教研究所研究員, 博士 (文学))

respectively for progressive tantric practitioners.

78. A Reconsideration of Vijñapti

Shintarō KITANO

Prof. Hiromi Yoshimura says that *vijñapti* in the *Madhyāntavibhāga* (= MV) I.3 known through the preaching of the “four manifestations” is used with a meaning different from that found in the *Mahāyānasamgraha*, *Viṃśatikā*, and *Triṃśikā*. This is due to the fact that *vijñapti* in MV I.3 does not convey a mediating subject or object of cognition. However, it is said that *ālayavijñāna* possesses cognition (= *vijñapti*) in both directions, inside and outside, according to a passage which describes the “proof of the existence of *ālayavijñāna*” in the *Viniścayasamgrahaṇī* of the *Yogācārabhūmi*. Taking the ideological influence of the *Viniścayasamgrahaṇī* into account, one may suppose that the author of the MV I.3 expressed “*bhājana-vijñapti* and *āśraya-vijñapti*” which originally meant direct cognition of *ālayavijñāna* through the contracted expressions of “*artha* and *sattva*”. In that case, *āśraya-vijñapti* would correspond to individual existence, while *bhājana-vijñapti* would correspond to the surrounding world, meaning that between the two, the relation of the subject and object of cognition is confirmed. As a result of the above-mentioned examination, in MV I.3, “*vijñapti* extending over a subject and object of cognition” is expressed through words different from *vijñapti*.

79. On the Mahāmāyātāntra

Jishō ŌMI

The *Mahāmāyātāntra* (abbr. MMT) is classified by Bu-ston as a yoginītantra. This tantra consists of three chapters and has two other titles, Parama-guhya and Mahāguhya. Ratnākaraśānti (ca. 10c.-11c.) wrote a commentary on this tantra, entitled *Guṇavatī*. According to his commentary, the fact that the opening word is “*atha*” indicates that this tantra is a kind of ākhyātatantra or uttāratāntra (explanatory or supplementary tantra). In the present paper, I